

多様な学びをつなぐ 訪問型アウトリーチ支援

～長野市の「つながる」地域づくり～

1 はじめに

長野市では、全ての子どもたちを安心が実感できる学びの場につなぎ、社会的に自立していくことを支援するため、「つながる」をキーワードにした2本の柱で地域づくりを進めています。

一つ目の柱である、『「つながる」：明日も行きたくない学校』では、子どもが安心を実感できる学級運営や学校づくりを推進するために研修を充実させたり、校内教育支援センターへの市費支援員の配置を拡充したりするほか、スクールソーシャルワーカーや指導主事などの専門家を含めたチームで、定期的なスクリーニングを実施することで、心の小さなSOSも見逃さないようなチーム支援体制を構築しています。

二つ目の柱である、『「つながる」：多様な学びの場』では、フリースクール等民間施設との連携やSaSaLANDを中核とした教育支援センターの充実と合わせ、今回ご紹介する訪問型アウトリーチ支援の充実を進めています。

この2本の柱を軸とした施策を進めることで、不登校児童生徒に対する90日以上長期欠席者の割合を下げることに繋がっています。

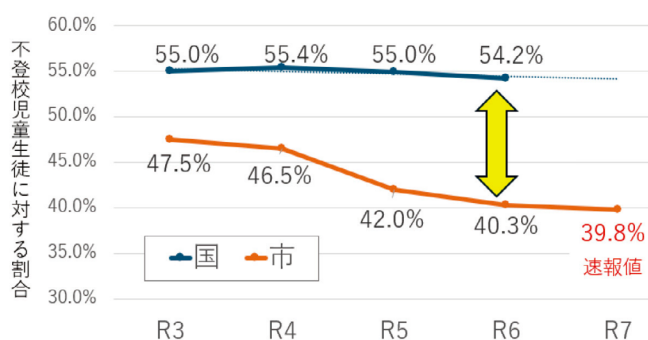


図1 欠席90日以上児童生徒の割合比較

2 訪問型アウトリーチ支援を進めた背景

令和6年度に開設した教育支援センターSaSaLANDなど、市内8カ所の教育支援センター(令和7年度登録388人)や民間のフリースクールも複数ありますが、取り巻く環境や子供の状態によっては、そこへもつなぐことができない子供達もいることが課題となっていました。

また、過去の不登校児童生徒の分析を進める中で、「不登校に占める低学年児童」と「継続不登校(前年度も不登校)」の割合の増加から、低学年で不登校になり長期に渡りその状態が続く傾向が確認されました。更に、1年目で30日～49日の不登校であった児童生徒のうち、約40%が翌年度に欠席90日以上状態に至っていたことから、長期化や低年齢化への早期対応が近々の課題であると考えました。そこで、令和7年度の新規事業では、両方の課題に対応するため、校内教育支援センターや教育支援センターを拠点としながら、それら

も利用することができずにいる子供を無くすことを目的とした不登校児童生徒アウトリーチ支援事業「つながるサポート」を開始しました。

3 つながるサポートの体制

(1) 3つのチームによる支援

「つながるサポート」は、アウトリーチコーディネーターを中心に①「教育支援センター指導員（アウトリーチスタッフ）」と②「しなのきサポーター」、③「教育支援センター指導員（オンライン支援担当）」の3つのチームと訪問支援をサポートしてくれる「出張フレンド」から成り立っています。

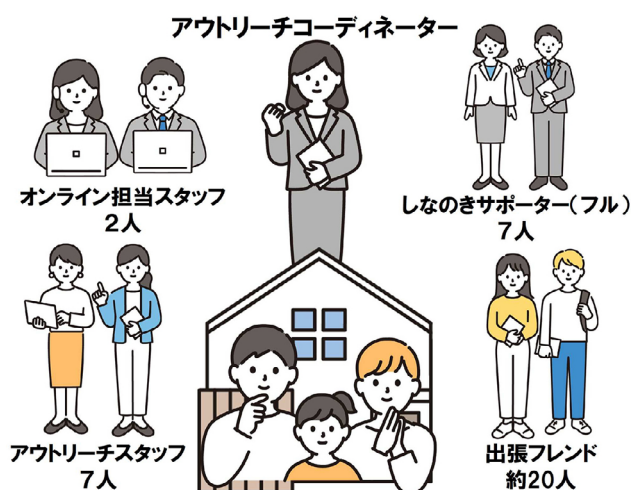


図2 つながるサポート体制

① アウトリーチスタッフとは

担当するエリアの教育支援センターを拠点としながら、不登校により長期に渡って自宅にすることが多い児童生徒に対し、保護者と丁寧に調整した支援計画に沿った訪問型オーダーメイド支援によって児童生徒との関係づくりを進め、校内外の教育支援センターやフリースクールなど、その子にあった学びの場や必要な支援へと繋いでいく職員です。必要があれば教育支援センターや学校でも一緒に過ごすことができます。

② しなのきサポーターとは

長期欠席児童の多い小学校へ配置し、校内教育支援センターの運営と自校児童のアウトリーチ支援の両面を担っている職員で、市内7校へ配置しています。1日の配置時間7時間15分のうち、4時間を校内教育支援センターの運営に充て、3時間15分でアウトリーチ支援の活動を行っています。より丁寧なサポートが必要な児童に対して、家庭訪問や登下校のサポートから校内教育支援センターでの学びの提供、原級への接続までを一人の職員によって一気通貫できるところに強みがあります。

③ オンライン支援担当とは

教育支援センターSaSaLANDを拠点としながら、マインクラフトなどのメタバース空間を運営することで、自宅にいる子供達に対してコミュニケーションの機会を提供し、学校や校内外の教育支援センター等へ通うことが難しい段階の子供達ともつながることができる環境を整えています。

(2) アウトリーチコーディネーターの役割

つながるサポートの統括として、研修の企画やアウトリーチスタッフが作成する支援計画がより状況に即して実行力のあるものになるよう指導助言などのマネジメントをします。

アウトリーチコーディネーターは、あらゆる状況に的確な判断を要求されることから、長野市の状況を把握しているスクールソーシャルワーカーから選抜しています。

(3) 信州大学教育学部との連携

(出張フレンド)

市内教育支援センターでは、信州大学の学生ボランティアに活躍してもらっていますが、つながるサポートで行う長期欠席児童生徒へのアウトリーチ支援には、繊細な心配りなど、より高い専門的能力が必要となります。そのため、信州大学の中でも心理学を専攻する大学院生に出張フレンドとして登録してもらい、少し年の離れたお兄さんお姉さんの立場で一緒に遊ぶなど、子供と

の関係づくりをしてもらい、その中で感じた気付きをスタッフと共有してもらっています。

(4) 情報交換会と専門職との連携

長野市の小中学校を7つのエリアに分け、エリアごとにアウトリーチスタッフとスクールソーシャルワーカー、指導主事の担当を配置しています。そのため、アウトリーチスタッフが、支援を開始する際や対応に困った時には、様々な専門職と協力し合っていることができる連携関係が構築されています。

また、毎月第3水曜日にはスクールソーシャルワーカーとアウトリーチスタッフが集まってケースごとの報告や検討を行う情報交換会を開催しています。さらに、第1水曜日には指導主事を交えて、学校への働きかけが必要なケースを相談する会も用意しています。

て、学校や保護者からの情報を収集して適切な評価（アセスメント）を行い、アウトリーチコーディネーターやスクールソーシャルワーカーの助言を聞き、必要な指示を受けながら丁寧に個別支援計画を作成していきます。

また、支援開始前には、保護者へ支援計画の内容を説明して同意をもらいます。できれば本人の同意ももらえると良いのですが、そこは無理せず、まずは関係づくりから進めていきます。そしてこの個別支援計画は、子供の意思や状態の変化に応じて、適時見直しています。

希望	本人	少しは勉強の遅れを取り戻したい
	親	昼夜逆転やゲーム三昧の状態を少しでも改善できたらと思う
	学校	自宅にひきこもらないような支援を目指す。 本人とつながりが切れないようにしたい
目標	家に閉じこもることなく外出の機会が増えている。 中学3年になる前に少しでも学習への意欲が前向きになる。	
主な支援内容	【学習面、生活面、家庭面等から記入】 ・ゲームが好きなので、ゲームやオンラインでのやりとりを通して、スタッフとの関係を築いていく。(短期) ・自宅のみではなく、東北教育支援センターでの訪問組み入れながら、外出する機会を作る。(中期) ・学校からタブレットを借り、それを使ってオンライン学習支援教材に少しずつ取り組めるようにする。(中期) ・東北教育支援センターでの訪問では、そこを利用する子どもたちとの関わりを徐々に作っていく。(中期) ・教育支援センターで他の子どもたちやスタッフとの関係が築けたら、教育支援センターの利用に繋いでいく。(長期的)	
その他	年 月 日 (本人) 年 月 日 (保護者)	

図4 個別支援計画(記入例一部抜粋)

4 オーダーメイド支援とは

アウトリーチ支援事業「つながるサポート」の概要

目的	アウトリーチコーディネーターを中心としたスタッフが家庭等に訪問することを通じて、子どもの心理的安定、生活リズムの改善、学習の遅れの解消、学びの場への接続等を支援する。
対象者	長期に渡って欠席し、自宅で過ごす長野市立小・中学校在籍児童生徒
支援内容	家庭訪問、自宅支援、登校支援、外出支援、学習支援 等
出席扱い	支援者と関わる事ができた場合は出席扱いとする
利用料	無料 ※体験等の費用は個人負担
申請	保護者の希望を受けて、学校から学校教育課に申請書を送付
支援体制	アウトリーチコーディネーター1名、アウトリーチスタッフ7名他、出張フレンド約20名 申請後、アウトリーチCoとともにスタッフが支援計画を作成
その他	車での送迎はできません 長野市HPにも情報を掲載

図3 つながるサポート概要

(1) 個別支援計画

長期欠席状況にある子供の状態や取り巻く環境は様々で、一様な支援では解決が困難です。また、最適な学びの場や必要な支援も対応する子供によって違うことから、つながるサポートでは、申込を受けた子供の状況につい

(2) 必要経費支給

アウトリーチスタッフは、あの手この手で子供達の興味を刺激して一緒に活動しますが、興味の内容や目的地によっては入場料などが必要になる場合があります。また、自宅で会うことが難しい場合にはカフェで会ったり、飲食店そのものを目的地にしたりすることもあります。

子供にかかる費用は保護者で負担するものですが、同行するスタッフにも出費が生じるため、支援に必要と認められる施設への入場料や席代相当と考えられる飲食

店の飲料代を支給する仕組みを作っています。

(3) 同行支援（公共交通、自転車）

車を使った子供の送迎は行いませんが、隣接市町村までなら公共交通に乗って目的地まで同行するほか、市内2か所の拠点に事業で利用できる折りたたみ自転車を配置していますので、車へ積み込み、訪問先の家から子供と一緒に自転車で学校や公園などへ同行することもできます。

(4) スタッフへの貸出物品

アウトリーチスタッフが子供の支援に使うためにタブレット端末の他、カードゲームやボードゲーム、イラスト、レジン、アイロンビーズ、段ボール工作、羊毛フェルト、折り紙、交換用シール、ドッジビー、キャッチボール、バトミントンなど、幅広い子供の興味関心に対応する物品を用意し、スタッフが自由に借りて持ち出せるようにしています。

最近では、ポケモンカードに興味を持っている子供との関わりのために、市職員から使わなくなったカードの寄附を募り、スタッフが子供と対戦できる体制も整いました。

(5) 子供の体験・学び応援事業による体験

長野市が市内小中学生へ配布している体験活動費等に充当可能な電子ポイントを使用して、ピザづくりなどの体験も一緒にしていて、ニーズに合わせて体験活動自体もカスタマイズしてもらえます。

(6) 多彩な研修

繊細な子供と接する訪問支援の性質上、信州大学の先生やスクールソーシャルワーカーなどの実務家を講師にした様々な切り口の研修を定期的に用意しています。特に新規スタッフの最初のひと月は、ほぼ研修に充てられます。

5 つながった成果

(1) 事業の成果

初年度となる令和7年度は136件の申込があり、89件で進展し、最終的には43件で、教育支援センターや学校などの学びの場につながりなど、支援計画の目標を達成することができました。

① 子供へのアンケート

子供へのアンケートでは、81%が無理をしないでいられるなど居心地の良さや安心感を評価していて、アウトリーチスタッフと一緒に話をしたり、活動をしたりすることが子供の安心感を育むことにつながっていることが分かりました。こうした安心感の高まりが、学びの場への接続や次の活動への意欲に影響していると考えています。

② 保護者へのアンケート

保護者アンケートでは、94%が精神的ストレスの軽減を実感していて、子供の自然体での成長や体力がついたことなど、子供の良い変化を実感する声や家族でスタッフが来る日を楽しみにしているなどの声が多く届いております。

③ 教職員へのアンケート

教職員アンケートでは、94%がアウトリーチが入ることでの子供の状況が好転したと評価していて、家から一歩も出られなかった子供が教育支援センターや学校へ足を運べるようになったことや、子供が笑顔になって会話が弾み登校日数を増やしたいと言い出してくれたことなど、子供達との関係を築くうえでとても効果的であったと評価しています。

(2) 共通の趣味を持つスタッフとオンラインでつながった事例

教育支援センターへ通うことも続かず、ほとんど欠席して自宅にいた子とオンラインでつながり、共通の趣味を持つ職員と「推し」の話で盛り上がることから関係が

生まれ、教育支援センターのバス遠足に参加したり、実際に会ってシール交換をしたり、体を動かす遊びを一緒にしたりすることができるようになりました。

最近では、趣味の「推し」を原動力に本人の希望による外出ができるようになってきました。

(3) 教育支援センターや学校とつながった事例

学校や教育支援センターへ行っていない子が、SaSaLANDメタバースに参加し始め、マイクラカップという大会に向けて前向きに取り組むとともに、作品づくりの中でSaSaLANDへ通う子供とオンライン上で交流をすることで、SaSaLANDへ通いたい思いが芽吹き、そこをアウトリーチスタッフが付き添うことで実際の利用につながりました。

最近では学校へ行くことにも前向きになってきて、アウトリーチスタッフ付き添いの下、学校へ行くことができるようになりました。

整いました。

今後は、これらの支援が最適かつ持続可能なものになっていくよう推進していきます。



図5 アウトリーチが繋ぐステップ

6 おわりに

つながるサポートが定着したことで、学校に通いづらさを抱えている子供が、その子に合った多様な学びの場や必要な支援に「つながる」ことができる体制が地域に